



パピルス & エレクトロニクス

ぱぴるすにくす

大阪工業大学中央図書館

〒535 大阪市旭区大宮5-16-1

☎ 06-952-3131

探検と人類学と私

高山 龍三

(工大・一般教育科教授(文化人類学))

情報が多いということは、よいことには違いないが、反面またつらいことでもある。

現代の探検は、情報の空白な土地に向けておこなわれている。私の行った、ヒマラヤの奥地のチベット人地帯は、それまで外国人のほとんど訪れたことのない、文献のきわめて少ない土地であった。そこがどんなところで、どんな人たちが住んでいるか、何もわからないのに等しかった。情報がないと不安がる人もあるが、私としてはその方がおもしろい。

富士山にも登ったことのない私は、行ってみると、5300mの峠を歩いて越さねばならなかった。それを越えないと、チベット人の住んでいる村へ行けないのだ。一か月のキャラ



(筆者が調査で住みこんだ村のチベット婦人)

バンののち、海拔4250mの村に、約3か月住みこんだ。

人類学の研究は、実験室や図書館でおこなわれるのではない。世界の人間や、その人たちがつくった文化が対象なので、どうしてもその人たちの住んでいるところへ行ってみて、しかも長時間粘らねばならない。言葉になれる必要もある。見ず知らずの土地へ行くのだから、親しくなるのに時間もかかる。それに一番大事なのは、人間や社会をじっくり観察するということである。できれば一年以上居続けることが望ましい。

文化人類学は、実験室や図書館を出て、現場へ行って情報を集める「野外科学」なのだ。直接の情報、生みのデータを、自分の体と手を使って、集めなければならない。現地の人と交わり、いっしょに生活をし、喜びも悲しみも共にすることで、ずいぶん得るものがある。いやそうしないと、集めたデータを使って組み立て、生き生きとした人間の生活や文化を描くというようなことはできない。人間の理解は心が通っていないからならないと思う。



村の3か月は楽しかった。しかしつらいことも多かった。まず食べものがない。村は富士山より高いところにあるので、大麦のほか何も作られていない。チベット人の主食のツァンパ（はったい粉）しかない。だが彼らはヤク（チベット牛）、ヒツジ、ヤギも飼う農牧民である。彼

ら自身あまり殺さないが、われわれはヒツジを週に一、二頭分けてもらって、それをお菜にした。しかし朝昼晩羊肉だけというもうんざりする。



(ヤクの背に交易の荷を積むチベット人)

またこの村に滞在中のキャラバンの間、全く風呂に入っていない。というのも乾燥地で燃料は貴重品、おまけに氷河から流れ落ちる川の水は冷くて、水浴びもできないのだ。しかしうまくしたもので、乾燥地というのは、そんなに垢がつかない。まあこういう風に生活は厳しいが、村人と仲よくなり、村の一員のように迎えられて、いろいろなことがわかってきた。

一妻多夫の結婚、鳥葬、ボン教、民具あつ

め（約400点千里の国立民族学博物館に収蔵）などである。

現地で集められた情報は、何冊かのフィールドノートに記録され、民族資料と共に持ち帰られた。これらの情報は、すべてカード化されて、今でも研究室にある。そしてこれらのカード化された情報を組み立て、他の文献も参照しながら、いくつかの民族誌論文が出来あがった。こういう生まのデータを基にした民族誌が積み重ねられたうえに、文化人類学の理論が出来あがるのである。

文化人類学では、理論が先行して、その理論を検証するために野外に出るのではない。そういう場合もあるかもしれないが、むしろ重要なのは、現場でのデータの積み上げのうえに、仮説を発想するという野外科学的アプローチなのだ。

この野外科学的アプローチは、何も文化人類学に限ったことではあるまい。諸君らの将来の仕事のうちで、新製品を開発するとか、新市場を開拓するとか、地域計画をたてるとか、組織改善のように創造的な仕事をするときに必要であろう。文献を読破して頭の中で推理推論する書齋科学的アプローチと、仮説を検証する実験科学的アプローチに加えて、この野外科学的アプローチを薦めたい。

(私の探検については川喜田二郎『鳥葬の国』講談社文庫参照)

〈著書紹介〉

『ヒト・文化・文明』—— 野外科学としての人類学入門 ——

高山龍三著 八千代出版

この図書は、第1図書室に配架しています。分類「389 T」です。

右の写真は「鳥葬の国」P168からの抜粋。高山先生28歳の時です。「鳥葬の国」には普段お目にかかれない学術調査団の内幕が軽快な筆致で描かれています。

図書は、第1図書室、文庫用書架に配架してあります。

(わが高山隊員(中央)の商談。彼は、けっして向こうの言い値で買わず、ねばりにねばって安く買う。写真はそのねばりの最中。)



シリーズ No. 2 図書館の仕事

(2) 整理係

学園図書館のコンピュータシステムは大阪工業大学中央図書館、摂南大学図書館、同・枚方分館、高校図書室の3館1室をオンラインネットワークで結んでいます。この図書館の電算化は整理業務の省力化に大きな力を発揮しました。前置きはこれぐらいにして「整理係」とは何をする係なのか本論に入りましょう。

「整理係」とは一言で言えば、受入れられた図書館資料を利用者である皆さんが少しでも効率よく活用できる状態に準備する係のことです。そして、その準備のためにはツール(道具)が必要で、次のものを使っています。
①日本十進分類法(NDC)、②日本目録規則、③基本件名標目表、④英米目録規則、⑤デューイ十進分類法等です。これらのツールに精通し、使いこなすことが整理係には要求されます。ですからこの係は図書館では専門職の部類に入ります。したがって、図書館司書資格を有する職員が担当しています。

さて、具体的な仕事の内容はといいますと
①図書の分類作業(図書ラベルに表示する数桁の番号をつけること)、②目録作業(図書資料の情報として必要なものを抜き出すこと)、③装備(図書資料に図書ラベルの貼付や蔵書印を押すこと)等になりますが、その作業そのものは科学技術の進歩に伴って徐々に移り変わりを見せています。中央図書館でも昭和57年4月から電算化により図書カードの作成が廃止されるなど、省力化と迅速化が実現されました。しかし、一方では新しい知識としてコンピュータのソフトウェアやプログラム理解の能力が要求され、電子図書館への道は加速度を増してきています。

現在、整理は専任3名(男子1名、女子2名)が担当し、ほかに電算化担当1名がいま

す。昭和58年度の図書整理冊数は約8,400冊で、その中には248点の特殊資料(録音テープ、スライドフィルム、マイクロフィルム等)も含まれています。

最後に触れておきたいのが、Japan/MARCや他の市販マークの導入が大学図書館等に進行してきたことです。MARCとは、Machine Readable Catalogの略で、機械可読目録と訳されます。カード目録に代わって、コンピュータに読めるように磁気テープの上に記録したものです。(坂本徹朗著『図書館とコンピュータ』による。) ジャパンマークの内容は、国立国会図書館が発行する『日本全国書誌』週刊版で見ることができます。マークの導入は、データの統一性という点でもメリットがあり、研究や学習のために、詳しい参考調査が提供できるという点でも、有効な利用が期待されると思われます。

本学においても、昨年度、第1回の東販/MARCの導入が実験的に行われ、現在、第2回の導入を実施しています。今後はこのことによっても利用者への情報提供が一段と充実したものになるでしょう。

参考係(奉仕係)から

対外文献複写の申込み件数が500件を突破!

S 56年	S 57年	S 58年
400件	433件	479件

あなたも利用してみませんか?

メインカウンターで受付けています。

〈図書館からのおねがい〉



わたしたちを迷子にしないでください。

図書館活用の手引き

⑥ 図書の予約

中央図書館では電算システム導入後、はじめて図書貸出の予約ができるようになりました。今回はこれについて説明します。開放端末機を使った所蔵検索の結果、「貸出中」となっている時などに利用してください。

予約の方法はいたって簡単です。まず、①カウンターの係員に「予約をお願いします」

と告げ、ついで② 予約したい図書の番号(所蔵検索時にわかる)とあなたの「利用者番号」を申し出てください。この申し出によって係員が端末に入力します。次に係員は自動印刷される「貸出予約票」をあなたに渡します。これですべてが完了です。その「貸出予約票」に印刷されている貸出図書の返却期限を目安に来館してください。貸出図書の返却が遅れた場合は、改めて掲示でお知らせします。なお、2週間を過ぎても貸出しがない場合は予約が取消しになりますので注意してください。

淀川ぶらり散策 〈第1話 淀川の流れ〉

淀の川面(かわも)は、今日も静かである。淀川河川敷のわんど(水たまり)には、日が一釣り糸を垂らす太公望の姿が見られる。

この静かなたたずまいを見せる淀川の流れも、古代よりごく近年まで大雨がふるとすぐに氾濫する、厄介な川であった。太古の昔から現在に至るまで、淀川の流れは何を見続けてきたのであろうか。水にまつわる話には、悲しい話が多いとされるが、淀川流域に伝わる話にも悲話が見られる。淀川の右岸・左岸の史跡やそれにまつわる逸話など、おいおい紹介していくことにしよう。

淀川流域の繁栄は、桓武天皇が都を平城京から長岡京へ、さらに平安京へ遷都したことで深いつながりがある。淀川は、当時西国地方からの租税となる物資の運搬に、また賦役労働のために集められた人夫や、地方に赴任する役人・旅行者の往来等のため、多数の船

が行き交い、大量の物資や多数の人を運んだ。いうまでもなく淀川は、京一大阪を結ぶ水上交通の要路として重要な役割を果し、その流域の文化に大きな影響を与えてきた。

さて、淀川と一般に呼び称されるが、「旭区史」によれば次のように記されている。「昭和40年の河川法の改正で『淀川』が定められた。それによると、琵琶湖から毛馬一長柄橋一十三大橋一伝法大橋を経て大阪湾へ通ずる流れを『淀川』といい、毛馬の洗堰から南に折れて中之島に至る流れは『旧淀川』と呼ばれた。

しかし、この改正のとき、ただし書きで旧称、俗称、通称の使用を認めたため、呼び方がまちまちになった。大阪市の表示は、琵琶湖から長柄橋までが『淀川』で、長柄橋から大阪湾河口までは『新淀川』、毛馬から中之島東端までは『大川』となっている。……」

編集後記

●いよいよ師走。今年最後の「ばびろにくす」をお届けします。

●「そこがどんなところで、どんな人たちが住んでいるのか……」未知なるものへのあこがれと挑戦。今回は高山先生にお願いしました。「人間の理解は心が通っていなければならないと思う」は先生の基本的な研究姿勢なのでしょう。含蓄ある内容です。また挿入

の写真についてもお手数をおかけしました。

●シリーズとして「図書館の仕事」に加え「淀川ぶらり散策」を本号から連載します。淀川は工大のすぐ近くに位置しています。グリコ・森永事件で一躍脚光をあげる淀川の右岸・左岸。身近にありながら淀川流域の歴史・文化等、案外知らないものです。とうとうと流れる淀の流れは何を語ってくれるのでしょうか。